

海老名産の主な品種

【とちおとめ】

栃木県生まれ。
「久留米49号（とよのか×女峰）」と「栃の峰」の交配種。日持ちがよく、ヘタが大きい。



【紅ほっぺ】

静岡県生まれ。
「さちのか」と「章姫」の交配種。鮮やかな紅色。中まで赤くやわらかい。



栽培の変遷

昭和 5年	「福羽いちご」石垣栽培（※）開始
昭和18年	第2次世界大戦の影響で栽培を全面休止
昭和24年	栽培を本格再開
昭和38年	ハウス栽培導入
昭和42年	石垣栽培 終焉
昭和45年	「春の香」栽培開始
昭和47年	「宝交早生」栽培開始
昭和50年	「宝交早生」に全面転換
昭和55年	ガラス温室建設相次ぐ
昭和60年	「女峰」導入。日持ちの良さなどから市場で推奨
平成10年頃	「とちおとめ」栽培・出荷
平成14年頃	「紅ほっぺ」栽培・出荷



おいしい見分け方
つぶつぶがくっきり

おいしい食べ方
ヘタをつけたまま流水につけふり洗い

おいしい見分け方
緑色が濃くみずみずしいヘタ

おいしい見分け方
赤色が鮮やかで傷がない



実（瘦果）

果実の部分。この中に種があります

花托（偽果）

花の付け根が膨らんだ、茎やぐくにあたる部分

エネルギー
約34kcal/100g

海老名のイチゴを

知る

イチゴは果物？ 野菜？

果物の定義は簡単にいうと木になる果実のこと。イチゴはバラ科の多年生植物で、樹木などの木本ではなく畑やハウスでも栽培できる小型の草本です。果物と呼ばれることが多いですが、一年生草本植物のスイカやメロンなどと同じで野菜に分類されています。

赤い部分は果実じゃない？！

表面の種のようなつぶつぶが「瘦果」といわれる本当の果実の部分。この1粒がリングゴ丸ごと1個と同じ位置付けで、種は瘦果1粒の中にそれぞれあります。果実とされている赤い部分は茎やぐくなどが肥大化した花托で、ベッドのように果実を包み守っています。「瘦果」に対し「偽果」といいます。

海老名のイチゴ まるごと大特集！

今が旬の甘くておいしいイチゴ。海老名市のイチゴの出荷量は県内で1番です。栽培は昭和初期に始まり、時代とともに栽培方法を変えて今日の出荷量を誇っています。市内にはイチゴをモチーフにした公園や、イチゴ農園が連なる通称ストロベリーロード、市内企業は味や香り、色や形をイチゴに寄せた商品を開発・販売するなど、海老名にはイチゴがいつばい。体がイチゴの市公式キャラクター「えびにゃ」は今年で7歳です。「えびにゃのお誕生日パークティ」や同時開催の「海老名いちごフェア」のお知らせ（11頁）とともに、ありとあらゆる海老名のイチゴをご紹介します。

園シティブロモーション課 ☎（235）4574

海老名のイチゴ栽培のはじまり

日本では江戸時代末期頃にオランダから運び込まれ、1872（明治5）年に栽培が始まったとされています。

海老名では1930（昭和5）年、「福羽いちご」の石垣栽培（※）を開始。当時、石垣イチゴ（※）に強い関心を寄せていた旧有馬村今里に住む三田 淳氏が、その栽培方法を導入していた旧寒川村から苗を取り寄せて始めたのが最初だったようです。

昭和7年には社家や中新田などが加わり15戸ほどだった栽培農家は6年後には約300戸ほどに広がりました。

が、有馬村と海老名村全域はイチゴの産地として発展してきました。30年には海老名町・有馬村が合併し「いちご組合」も統合。栽培が一層盛んになった35年には、海老名の栽培農家は県内の約3割と大産地となりました。

現在、市内のイチゴ農家は約20戸。平成28年度の出荷量は約60トと海老名市のイチゴは県内でナンバーワンを誇ります。

※石垣栽培・石垣イチゴ

段々に積み上げた玉石（海老名では相模川の石や、コンクリート板の間に苗を植え付けて日当たりをよくし、石の輻射熱を利用して保温効果をあげたイチゴの栽培方法。または、この方法で栽培したイチゴのこと。



昭和30年代、社家の石垣栽培

《参考資料》海老名市史9／海老名のいちご／市ホームページ／からだにおいしい野菜の便利帳

